



Title	新聞記事で表記される国籍情報の潜在的影響：潜在的連合テストを用いた外国人ステレオタイプ活性化の検討
Author(s)	金田, 宗久; 岡本, 真一郎
Citation	対人社会心理学研究. 2015, 15, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新聞記事で表記される国籍情報の潜在的影響^{1) 2)}

—潜在的連合テストを用いた外国人ステレオタイプ活性化の検討—

金田宗久(愛知学院大学心身科学部)

岡本真一郎(愛知学院大学心身科学部)

本研究では、新聞記事で表記される国籍情報による外国人ステレオタイプ活性化の影響についてプライミング・パラダイムを用いて検討した。外国人に対する態度の測定手法として、主に潜在的連合テスト(Implicit Association Test; IAT)を用いた。研究1では、国籍情報を日本国籍・ネガティブなイメージを抱かれている外国籍・ポジティブなイメージを持たれている外国籍と国籍不特定のいずれかに操作した殺人事件に関する記事を提示した。その結果、外国人に対する態度において表記された国籍情報による影響はみられなかった。研究2では、事象の望ましが同質な記事を複数提示した結果、表記された国籍情報によって外国人に対する潜在的態度に違いがみられた。国籍自体に抱かれているイメージがネガティブである場合、ポジティブなイメージを持たれている外国籍のときよりも外国人に対してより否定的な潜在的態度を示すことが明らかとなった。

キーワード: 新聞記事、国籍イメージ、プライミング、ステレオタイプ活性化、潜在的連合テスト

問題

不特定多数の受け手に対して情報を発信するマスメディアにおいて、過度な報道による人権やプライバシーの侵害、いわゆるヤラセなど報道のあり方についての問題がしばしば取り上げられる(川上, 1994)。例えば、報道で慣習的に行われている外国人犯罪者の国籍表記が、同じ国籍の外国人に対する謂われない非難などの悪影響を及ぼしようと懸念されている(紙山, 2005)。

マスメディアが及ぼす受け手への影響については、マス・コミュニケーションの効果研究によって検討されてきた。近年では一連の情報処理過程に焦点を当てた認知的アプローチによって検討がなされており、その一つとしてプライミング効果があげられる。例えば、テレビニュースで取り上げられた政治的問題は、その問題についての考え方に影響するだけでなく、その問題に関連する人種に対する認知を政治的側面の評価に結びつけて判断するようになることが指摘されている(Domke, McCoy, & Torres, 1999)。

プライミング効果は、社会的認知研究で広く扱われており、社会的プライミング研究とも呼ばれる(北村, 2001)。例えば、Higgins, Rhole, & Jones(1977)は、先行課題で接触した特性語が、両義的な特性で描かれた人物の特徴づけに影響を与えることを示した。すなわち、刺激人物を描写した文章はポジティブあるいはネガティブのどちらとも決めがたい曖昧な表現であったにもかかわらず、先行の特性語がポジティブであれば、後続の人物評定がポジティブに評価され、逆にネガティブ特性語を先に提示した場合は、その人物はネガティブに評価されたのである。また、Devine(1989)は、アフリカ系アメリカ人のステレオタイプに関連する特性語を関下プライミングすることで、個人的信念に関わらずステレオタイプの自動的

活性化が引き起こることを明らかにした。Devine は、この結果からステレオタイプが自動的に活性化する自動的過程と、意識的に個人的信念を促進させステレオタイプの影響を抑制させる統制的過程があるとする分離モデル(dissociation model)を提唱した。

ステレオタイプ活性化については、先行刺激として特性語だけでなく、ある集団メンバーのステレオタイプの描写が用いられる。そのような描写への接触が、後続のステレオタイプ化された集団に対する判断や記憶などに影響するという知見が得られている(Dixon, 2006; Dixon & Maddox, 2005; Ford, 1997; Hurtz & Durkin, 2004; Johnson, Adams, Hall, & Ashburn, 1997)。例えば、Ford(1997)は、アフリカ系アメリカ人をステレオタイプのあるいは中性的に描写したコメディ番組を視聴させた後に、暴行を犯したある学生についての描写を読ませ、その罪に対する評価を求めた。その結果、暴行を犯した学生がアフリカ系アメリカ人であるとされた場合、先に中性的コメディを視聴していたときよりもステレオタイプのコメディを視聴していたときのほうが罪をより重く評価したのである。また、Johnson et al.(1997)は、暴力的記事を読んだ実験参加者は、その後に別の刑事事件について評価した際、その刑事事件を犯した人物の人種が白人や不特定のときよりもアフリカ系アメリカ人のときのほうが、事件発生の原因を人物の傾性(disposition)に帰属させることを示した。これらの知見からは、先行刺激によって特定のステレオタイプ(e.g., 攻撃的)が活性化し、それにリンクする他のカテゴリーや特性に活性化が拡散することで、後続のステレオタイプ化された集団に対する判断がよりステレオタイプのなものになったとされる。すなわち、連合ネットワークモデル(associative network model; Collins & Loftus, 1975)を支持する。

連合ネットワークモデルでは、ノードと呼ばれる表象された知識や概念が内容的に類似するもの同士でリンクしており、あるノードが活性化されると、それに強くリンクしている他のノードにも活性化が拡散していくという考え方である(唐沢, 2001)。このモデルに従えば、マスメディアによって伝達される情報(e.g., ニュース、ステレオタイプの描写されたドラマ)が特定のステレオタイプを活性化させ、さらにそれが拡散していくという可能性が考えられる。加えて、Devine(1989)の分離モデルによれば、ステレオタイプ化された集団に関連する情報あるいは特性を表す語句などに接触するだけで自動的にステレオタイプ活性化が引き起こされてしまうのである。ここで指摘される点は、マスメディアにおけるステレオタイプ維持にはたらく影響も示唆するものであると考えられる。また、ステレオタイプを偏見や差別の一要因として考えるならば、不特定多数の人に影響を及ぼしうるこのようなマスメディアの効果は軽視されるべきではない。よって、本研究ではマスメディア接触によるステレオタイプ活性化について検討することを目的とする。

しかしながら、Ford(1997)やJohnson et al.(1997)などの先行研究では、プライミング後の対象人物への評価を質問紙(顕在的尺度)により測定している。そのため、実験参加者による評価懸念や社会的望ましさの表出などにより、真の評定値を測定しきれているかが疑わしいという指摘がある(Devine, 2001)。また、たとえステレオタイプ活性化がFord(1997)やJohnson et al.(1997)の結果をもたらしているとしても、顕在的尺度における反応だけではステレオタイプ活性化の測定として十分ではないと考えられる。したがって、顕在的尺度だけでなく潜在的尺度も用いたステレオタイプ活性化の検討が必要である。

潜在的側面の代表的な測定手法としては、潜在的連合テスト(Implicit Association Test; IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)がある。IATは個人が有する、ある対象概念とその属性間の潜在的な認知構造(連合強度)を測定する方法であり、アフリカ系アメリカ人やジェンダーに対するステレオタイプに関わる潜在的態度を表す指標として用いられている(Lowery, Hardin, & Sinclair, 2001; 野寺・唐沢, 2006; 野寺・唐沢・沼崎・高林, 2007; Steele & Ambady, 2006)。本研究では、実験参加者における社会的望ましさなどの懸念を取り除くこと、およびステレオタイプ活性化の測定という点からIATを用いる。

ところで、現実場面においては事件・事故、災害、あるいは風物詩などさまざまな内容が報道されるが、それらは視聴者に何らかの感情や印象をもたらしていると考えられ、その重要なものとしてポジティブ・ネガティブの次元での影響が挙げられる。湯川・遠藤・吉田(2001)は、暴

力映像を残酷で衝撃的な「暴力性」の高いもの(e.g., 戦争映画、マフィア映画)と残酷さがなく虚構的で様式化された「娯楽性」の高いもの(e.g., アニメーション、時代劇)とに二分し、暴力性はネガティブ感を高めて不快感情を強め、娯楽性はポジティブ感を高めて快感情を強めるということを示している。このことから、残酷で衝撃的である報道内容によってネガティブ感・不快感情が高められると考えられる。一方、娯楽性に関しては、スポーツなど特定の伝達内容に限ってポジティブ感・快感情を高めていると考えられる。

ポジティブ・ネガティブの影響は、同等ではない。両者の差異を説明する概念として、「ネガティビティ・バイアス(negativity bias; Kanouse & Hanson, 1972)」がある。これは、ポジティブな刺激よりもネガティブな刺激が及ぼす影響のほうが大きいという非対称性(Positive-Negative Asymmetry; PNA)を指している。ネガティビティ・バイアスの解釈として、パレアナ仮説(Pollyanna Hypothesis)が提案されてきた(Boucher & Osgood, 1969; Matlin & Stang, 1978)。パレアナ仮説では、人には「世の中は良いところである」と信じる普遍的な認知傾向があるとし、ネガティブなものよりもポジティブなものが多い世界との対比効果によってネガティブなものの方が重視されると推論している。

このほかに、ポジティブな評価に対する印象とネガティブな評価に対する印象との性質上の違いについて対応推論理論(correspondent inference theory; Jones & Davis, 1965)に基づき検討されている。吉川(1989)は、ある人物のポジティブな行動を描写した文と同一人物のネガティブな行動を描写した文を呈示し、それぞれの文章の呈示後に印象評定を行い、なおかつ1週間の間隔を空けて再びその人物の印象評定を行った。その結果、ネガティブな印象はポジティブな印象よりも覆されにくく、また、持続されやすいということが示された。

以上のようなポジティブとネガティブの性質上の違いは、印象の強固さや持続性だけに留まらず、プライミングの影響を検討する際にも、この点は重要であろう。

本研究では、ニュース記事で表記される国籍情報による外国人ステレオタイプ活性化の影響についてプライミング・パラダイムを用いて検討する。そして、顕在的態度と潜在的態度の指標を用いてプライミングの影響をよりの確に評価することを目指す。

態度対象には特定の外国籍ではなく、「外国人」というカテゴリーを掲げるが、「日本人」と「外国人」をどのような基準で区別するかによって、分類される下位カテゴリーは異なる。このため本研究では、日本の国籍を有する人物を「日本人」、日本以外の国籍を有する人物を「外国人」と定義する。

研究 1

研究 1 では、新聞記事で表記される行為者の国籍情報を操作し、その記事への接触による外国人ステレオタイプの活性化の影響について検討する。記事内容は殺人事件を扱い、国籍情報は日本人、外国人、不特定とする。さらに外国人については、良いイメージの外国人と悪いイメージの外国人が存在するため(向田, 2002, 2003)、ポジティブなイメージのある外国籍(以下、pos.外国籍)とネガティブなイメージのある外国籍(以下、neg.外国籍)を区別する。

新聞記事を読み終えたのち、潜在的態度を紙筆版 IAT によって測定する。IAT は、元々パーソナルコンピュータを用いて実施される課題(PC 版 IAT)であるが、最近では同質な課題を紙面上で実施する紙筆版 IAT が用いられており、PC 版と同様な評価が得られている(Lemm, Lane, Sattler, Khan, & Nosek, 2008; 岡部・木島・佐藤・山下・丹治, 2004)。このため、研究 1 では紙筆版 IAT を用いて外国人に対する潜在的態度を測定し、新聞記事における国籍表記が、外国人に対する潜在的態度にどのような影響を及ぼすかを以下の仮説によって検討する。

仮説 1. 外国籍が表記された場合、日本国籍や国籍不特定の場合に比べて外国人ステレオタイプが活性化されやすく、外国人に対するネガティブな反応をより示すだろう。

仮説 2. 外国籍がポジティブなイメージをもつ場合より、ネガティブなイメージの場合のほうが、外国人に対するネガティブな反応がより顕著に示されるだろう。

方法

実験参加者 愛知県内の大学で心理学の授業を受講している大学生 105 名(女性 62 名、男性 43 名、平均年齢 19.53 歳、 $SD = 1.69$)が実験に参加した。実験は授業時間の一部を利用し、20 名程度からなる集団で実施された。

実験計画 国籍情報 4 水準(日本・neg.外国籍・pos.外国籍・不特定)からなる実験参加者間 1 要因計画とした。さらに、これら実験群のほかに、紙筆版 IAT のみを実施する統制群を設けた。

刺激文(新聞記事) 金田・岡本(2012)を参考に、殺人事件に関する実際の新聞記事 1 件を題材とした。また、国籍情報の操作として、金田・岡本(2012)においてネガティブな記事(殺人、窃盗など)における容疑者の国籍として最もイメージされやすかった「フィリピン」を neg.外国籍、最もイメージにあてはまらないと評価された「オーストラリア」を pos.外国籍とした。日本人の場合は人名のみを表記し、不特定の場合は人名も国籍も表記せずにある人物をほのめかす文章構成とした。また、容疑者および被害者の性別を男性に統一し、事件発生場所を参加者にとって身近な地域に変更した。さらに、容疑者の身体的特徴(e.g., 身長、服装)と容疑者が逃走中であることを付け加えた。前者の変更は、実験参加者の性別による情報の捉え方の差異を低減し、身近な地域にすることで記事への注目を促すという目的から行った。後者の情報は、国籍不特定という操作を行うためになされたものである。

害者の性別を男性に統一し、事件発生場所を参加者にとって身近な地域に変更した。さらに、容疑者の身体的特徴(e.g., 身長、服装)と容疑者が逃走中であることを付け加えた。前者の変更は、実験参加者の性別による情報の捉え方の差異を低減し、身近な地域にすることで記事への注目を促すという目的から行った。後者の情報は、国籍不特定という操作を行うためになされたものである。

冊子 A(記事の提示および記事内容に関する質問紙) A4 用紙(縦向き)に実験条件ごとの記事が印字され、次ページに記事内容に関する質問項目が印刷されていた。記事内容に関する質問項目では、「実社会での生起頻度(1:ほとんど生じていない~7:かなり生じている)」、「その出来事が自分にとって身近に感じられる程度(1:全く身近に思えない~7:非常に身近に思える)」、「記事に対する興味(1:全く持たなかった~7:非常に持った)」の計 3 項目について 7 段階評定で回答を求めた。

冊子 B(紙筆版 IAT) A4 用紙(縦向き)で表紙を含めた 12 ページから構成された。紙筆版 IAT は、ページ上段に分類すべきカテゴリーが設定され、ページ中央に単語が縦に並べられる。それらの単語の意味から、設定されたカテゴリーのどちらに分類できるかを判断し、単語左右の空白部分にチェックを入れていくという課題である。この課題がいくつかのブロックから構成されており、各ブロックが 1 ページごとに印刷されていた。そして、回答方法の例示とともに 1 ブロックあたりの制限時間が 20 秒間であること、できるだけ速く、正確に分類することを心がけること、カテゴリーとその配置に注意することなどの課題全般に関わる注意事項が説明された。つづいて、3 ページ目以降は課題用のページが挿入された。はじめに、練習課題を告げるページに次いで練習課題(計 3 ブロック)が設定され、その後、本課題を告げるページに次いで本課題(計 5 ブロック)のページが挿入された。

練習課題では、Greenwald et al.(1998)を参考にして「花」と「昆虫」、「快い」と「不快な」のカテゴリーを用い、それぞれについて 5 つの刺激語を設定した。そして、「花—昆虫」、「快い—不快な」、「花 or 快い—昆虫 or 不快な」の順に課題を実施した。練習課題での分類すべき単語数は 20 単語とした。

本課題では、分類カテゴリーとして「日本人」と「外国人」、「良い」と「悪い」を設定した。本課題での分類すべき単語数は 40 単語とした。実施順序は、第 1 ブロックが「日本人—外国人」を弁別する課題、第 2 ブロックが「良い—悪い」を弁別する課題であった。第 3 ブロックは、ブロック 1 と 2 の弁別内容を組み合わせさせた「良い or 日本人—悪い or 外国人」(以下、「GJ ブロック」)、第 4 ブロックは第 1 ブロックのカテゴリーを逆転させた「外国人—日本人」、第 5 ブロックはブロック 2 と 4 を組み合わせ

た「良い or 外国人－悪い or 日本人」(以下、「GF ブロック」)であった。ただし、第 1 と第 4 ブロック、第 3 と第 5 ブロックの順序を逆転させカウンターバランスをとった。

本課題で用いた刺激語は、各カテゴリに 5 語ずつ用意した。「良い－悪い」については、Greenwald et al.(1998)を参考に、「愛情」、「元気」、「楽園」、「幸運」、「誠実」を「良い」の刺激語として、「事故」、「不仲」、「災害」、「貧乏」、「苦痛」を「悪い」の刺激語とした。「日本人－外国人」については、平凡社教育産業センター(1987)を参照し、「リュウノスケ」、「サトシ」、「ジュンイチ」、「マサアキ」、「コウノスケ」を「日本人」、「ワルトハイム」、「ボータ」、「ニジンスカ」、「スンマン」、「フォンタナ」を「外国人」の刺激語とした。また、人名に関しては、漢字やアルファベットの文字の形態からカテゴリ判断がなされないように全てカタカナで表記した。

手続き はじめに 2 種類の課題への参加協力を呼びかけた後、指示があるまで中身を見ないように注意したうえで冊子 A および冊子 B を配布した。その後、冊子 A から開始し、記事を 2 分間に一通り読むように求めた。その後、途中でも次の課題に移るように指示し、記事内容に関する質問項目に回答を求めた。

全員の回答終了を確認した後、冊子 B を実施した。回答方法などの課題全般の説明をし、実験者の合図に基づいて練習課題、本課題の順に実施した。本課題が終了した後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。所要時間は全体でおおよそ 30 分であった。以上の手続きは実験群のもので、統制群の参加者には紙筆版 IAT のみ実施した。

結果

分析対象者 紙筆版 IAT のデータについては、Lemm et al. (2008) による分析基準を適用した。GJ ブロックおよび GF ブロックそれぞれの誤反応率が 20%以上の者、さらに正答数が 8 個以下の者を分析から除外し、101 名(女性 61 名、男性 40 名)を分析対象とした。

Table 1 刺激文で示された出来事に関する評価

	国籍情報			
	日本	neg. 外国籍	pos. 外国籍	不特定
生起頻度	5.75 (1.12)	5.76 (.83)	5.40 (.94)	6.11 (.66)
出来事の 身近さ	3.20 (1.44)	4.33 (1.28)	3.20 (1.64)	3.79 (2.04)
興味	4.20 (1.51)	4.81 (1.03)	4.25 (1.77)	3.63 (1.34)
<i>n</i>	20	21	20	19

出来事に対する評価 刺激文で提示された出来事に対する生起頻度、身近さ、興味を持った程度に関する評価の平均値および標準偏差を Table 1 に示す。それぞれの評定値について、国籍情報(日本・neg.外国籍・pos.外国籍・不特定)の 1 要因分散分析を行った結果、出来事への生起頻度($F(3, 76) = 1.98, p = .124, \omega^2 = .04$)、身近さ($F(3, 76) = 2.33, p = .081, \omega^2 = .05$)、記事内容に対する興味($F(3, 76) = 2.25, p = .090, \omega^2 = .05$)のいずれにおいても条件間に有意な差は認められなかった。また、それぞれの項目における全体の平均値と中点(4 点)との差の検定を行った結果、出来事への生起頻度は中点より有意に高く、実社会においてよく生じている出来事であると評価された($M = 5.75, SD = 0.92; t(79) = 17.00, p < .001, d = 1.90, 95\% CI = [1.55, 1.95]$)。出来事への身近さ($M = 3.64, SD = 1.66; t(79) = 1.96, p = .054, d = .22, 95\% CI = [-0.73, 0.01]$)と興味の程度($M = 4.24, SD = 1.47; t(79) = 1.45, p = .152, d = .16, 95\% CI = [-0.09, 0.56]$)は、中点との差が有意ではなく、どちらともいえないという評価が得られた。

IAT 効果量 Lemm et al.(2008)を参考に、次式によって IAT 効果量を算出した。

$$(X/Y) * \sqrt{(X - Y)}$$

ただし、式中の X は、組合せブロックの回答数のうちより大きい値、Y は組合せブロックの回答数のうちより小さい値である。また、組合せブロックのうち GF ブロックの回答数が GJ ブロックの回答数より多かった場合、正負を逆転した。したがって、この数値が高いほど「外国人」と「悪い」との連合がより強く、外国人に対するネガティブな反応を意味する。

全体の IAT 効果量について中点(0)との差の検定を行った。その結果、有意に正の値を示しており、外国人に対するネガティブな反応が確認された($M = 3.65, SD = 2.17; t(100) = 16.91, p < .001, d = 1.68; 95\% CI = [3.22, 4.08]$)。つづいて IAT 効果量について国籍情報(日本・neg.外国籍・pos.外国籍・不特定・統制群)の 1 要

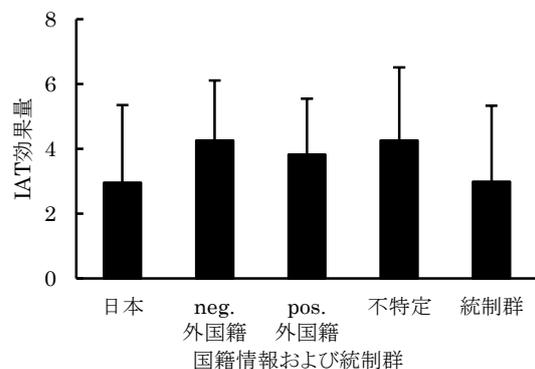


Figure 1 条件ごとにみた IAT 効果量の平均値と標準偏差

因分散分析を行った結果、国籍情報による有意な差はみられなかった($F(4, 96) = 1.88, p = .121, \omega^2 = .05$; Figure 1)。

考察

研究1では、殺人事件に関わる新聞記事で表記される国籍を操作し、その記事への接触による外国人ステレオタイプの活性化の効果について紙筆版 IAT を用いて検討した。

新聞記事で描かれた出来事に対する印象(出来事の生起頻度、身近さ、興味)は、表記された国籍に関わらず同等な印象を持たれていた。このため、出来事の描写については、条件間で同質な操作が与えられていたことが確認された。

外国人に対するネガティブな潜在的態度を示す IAT 効果量は、全体的にネガティブな反応が現れており、「外国人」と「悪い」という概念の連合強度が強いことが示された。しかしながら、記事で表記された国籍情報による差はみられず、外国籍を表記した場合、日本国籍や国籍不特定の場合に比べて外国人に対する潜在的態度がよりネガティブとなり(仮説 1)、さらにネガティブなイメージを抱かれた外国籍のときにネガティブな反応が顕著に現れるだろう(仮説 2)という仮説は支持されなかった。また、紙筆版 IAT のみを実施した統制条件と記事を読ませた後に紙筆版 IAT を実施する実験条件(4 条件)との間にも差は認められず、本実験で用いられた刺激文から外国人ステレオタイプを活性化することができなかった可能性が考えられる。刺激文の中で描写された人物は、特定の外国籍(i.e., フィリピン国籍とオーストラリア国籍)が表記されており、この操作によって活性化された概念は、例えば「フィリピン人」や「オーストラリア人」であったと考えられる。このため、「外国人」の概念の活性化には至らなかったと考えられる。そして、紙筆版 IAT によって測定されていた外国人に対する潜在的態度にはうまく反映されなかったのかもしれない。

上記のほか、に筆すべき点は、実験参加者の記事内容に対する興味や事象に対して身近に思える程度が高くなかった点である。いずれも「どちらともいえない」という評価がなされており、記事中の行為者の特徴を十分に読み取れていたか、また、そのように動機づけられていたかは確認されていない。

以上のことから、外国人ステレオタイプの活性化をより生じやすくするという目的から研究 2 では、刺激文として提示される記事を 1 件から 2 件に増やし、それぞれ異なる外国籍の人物を描写する。また、記事を読むことへの動機づけを高めるという目的から、記事内容に関する再生課題を含めて実施する。さらに、外国人に対する顕在的態度を測定することで、潜在的態度との関連について

検討する。ただし研究 2 では、外国籍表記の影響に焦点を当て検討するため、新聞記事で表記される国籍の操作は neg.外国籍と pos.外国籍に限定し、記事内容の望ましさをポジティブな内容とネガティブな内容で操作する。

研究 2

研究 2 では、イメージの異なる外国籍を表記した新聞記事への接触による外国人ステレオタイプ活性化の影響について検討する。ただし、外国人ステレオタイプ活性化を研究 1 よりも顕著にするため先行刺激としての記事を 2 件に増やし、さらに記事を読むことへの動機づけを高めるために再生課題を手続きに加える。また、ネガティブな記事だけでなくポジティブな記事も加え、記事内容の望ましさによるステレオタイプ活性化の効果について、顕在的態度と潜在的態度から検討する。仮説は次のとおりである。

仮説 3: 記事で表記される外国籍が pos.外国籍のときより neg.外国籍のときのほうが、その後の外国人に対する態度や判断がよりネガティブなものになるだろう。

仮説 4: 記事内容がポジティブなときよりもネガティブなときのほうが、その後の外国人に対する態度や判断がよりネガティブになるだろう。

方法

実験参加者 大学生・大学院生 82 名(平均年齢 19.80 歳、 $SD = 2.93$)であった。性別の内訳は女性 50 名、男性 32 名であった。

実験計画 国籍情報(pos.外国籍・neg.外国籍)×記事内容(ポジティブ・ネガティブ)の実験参加者間 2 要因計画とした。

実験装置 デスクトップ型パソコン(EPSON・HTNB461255) および CRT ディスプレイ(MITSUBISHI RDF173H)を使用し、Inquisit 2.0 による IAT 用プログラムを実行した。

刺激文(新聞記事) 研究 1 同様、金田・岡本(2012)を参考に、望ましい出来事(人名救助)に関する記事 2 件、望ましくない出来事(殺人事件)に関する記事 2 件をそれぞれ 1 組にして用いた。外国籍の選定については、金田・岡本(2012)の結果から、ポジティブな記事(人名救助、ボランティア活動など)に登場する人物の外国籍としてイメージされにくい国籍を望ましい記事における neg.外国籍(「ロシア」と「マレーシア」)とし、イメージされやすい国籍を pos.外国籍(「韓国」と「アメリカ」)とした。同様に、ネガティブな記事においてイメージされやすい外国籍を望ましくない記事の中で表記された neg.外国籍(「フィリピン」と「ブラジル」)とし、イメージされにくい国籍を pos.外国籍(「オーストラリア」と「ドイツ」)とした³⁾。刺激文は、A4 用紙 1 枚に 1 件ずつ印字されていた。

記事に関する質問紙 2 種類の新聞記事それぞれについて、(1) 見出し、(2) 出来事の発生場所(都道府県名で回答)、(3) 氏名が明記された登場人物の人数、(4) それぞれの人物の国籍、(5) それぞれの人物の職業の再生課題を設けた。さらに、(6) 記事内容の望ましさ、(7) 記事に対する「快－不快」の程度について 7 件法で回答を求めた。

外国人に対する態度測定質問紙 外国人との交流や日本の治安との関係性に関わる 6 項目に 7 件法(1: まったくそう思わない～7: 非常にそう思う)で回答を求めた。具体的には、(1) 「日本人が国際的な視点に立つために、外国人との交流は重要な事柄である」、(2) 「日本国内で生じている犯罪のうち、日本人の犯罪よりも外国人の犯罪のほうが悪質である」、(3) 「企業はもっと積極的に外国人を雇用すべきである」、(4) 「日本の治安は、外国人によって悪化させられている」、(5) 「外国人が日本で暮らしやすくなるように、地域全体での支援に加え、個人的にも積極的なサポートをするべきである」、(6) 「外国人が多く集まっている地域や場所は危険なので、できるだけ近づきたくない」であった。

PC 版 IAT 課題は 7 ブロックから構成された。第 1 ブロックは「日本人－外国人」を弁別する練習課題、第 2 ブロックは「良い－悪い」を弁別する練習課題であった。つづく第 3 ブロックでは、ブロック 1 と 2 の概念を組み合わせた弁別課題の練習、第 4 ブロックがその本試行であった。そして、第 5 ブロックは、ブロック 1 での「日本人－外国人」の配置を左右逆転させた課題の練習、第 6 ブロックと第 7 ブロックは、逆転させた概念とブロック 2 で用いた概念との組み合わせ課題の練習と本試行を行った。試行数は、練習で 20 試行、本試行では 40 試行であった。「良い or 日本人－悪い or 外国人(GJ ブロック)」と「良い or 外国人－悪い or 日本人(GF ブロック)」の実施順序は、全ての実験参加者が GJ ブロックから先に実施した。刺激語は研究 1 と同じものを用いた。

プログラム実行後、課題全体についての教示画面が提示された。その内容は「課題は、画面中央に表示される単語および名前を 2 つのカテゴリーのうちどちらかに分類するというものです。例えば、『良い』『悪い』というカテゴリーが設定されており、表示された単語がどちらの意味を含んでいるのかを判断してください。2 つのカテゴリーは、常に画面の右上と左上に表示されます。しかし、判断内容が変わるごとに分類すべきカテゴリーも変わりますので、カテゴリーに注意してください。表示された単語や名前は、できるだけ速く、かつ正確に分類することを心掛けてください。カテゴリーへの分類は、キーボードの [D] と [K] のキーを使用します。それぞれのキーは定められた指で押してください。[D] キーは左手の人差し

指、[K] キーは右手の人差し指で押してください。」という内容であった。また、教示画面に引き続き、実際の課題画面の一例を示し、カテゴリーや単語が表示される位置を確認してもらった。その後、参加者自身がスペースキーを押すことで試行を開始した。

各ブロックの第 1 試行目は、教示が消えてから 500ms 後に開始された。刺激語は画面中央に提示され、背景色は白であった。正答の反応キーが入力されると刺激語は消え、250ms 後に次の試行に移った。誤反応の場合、刺激語の下に赤い「×」印が示され、改めて正答の反応キーを押すことで「×」印は消え、250ms 後に次の試行が始まった。刺激語が提示されてから正答キーが押されるまでの時間を記録した。刺激語はランダムに提示された。

手続き 実験は、個別に実施された。はじめに「新聞記事の構成が及ぼす記憶への影響について」の検討が研究目的であることを告げてから開始した。そして、望ましいあるいは望ましくない記事 2 種類を提示し、両記事の内容を 4 分間のうちに読んで十分に理解するように求めた。4 分後、記事を回収し、PC 版 IAT を実施した。ディスプレイまでの距離は約 60cm とした。IAT の操作方法などについては画面に提示したものを口頭で伝えた。それ以降の各ブロックに関しては、画面上の説明にしたがって進めるように教示した。参加者から課題が終了したことを告げられた後、記事に関する質問紙を配布し、回答を求めた。ここでの制限時間は設定しなかった。そして、回答を終えたことを確認し、外国人に対する態度測定質問紙への回答を求めた。

質問紙への回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。実験全体の所要時間はおよそ 30 分であった。

結果

分析対象者 記事内容に関する再生課題のうち、2 種の記事で表記された国籍を正しく想起できた者を以下の分析の対象とした。これは、国籍情報の実験的操作が正しく行われたことを確認する目的から設けた基準である。その結果、15 名を除外した 67 名(女性 45 名、男性 22 名)を分析対象者とした。このほか、Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) を参考に IAT の組合せブロック(GJ ブロックおよび GF ブロック)でのエラー率が 20%以上の者、300ms 以下の反応時間が 10%以上の者という除外基準を設けたが該当する者はいなかった。

記事内容に対する評価 2 種類の新聞記事それぞれに対する望ましさと「快－不快」の評価得点の平均値を算出し、外国籍(pos.外国籍・neg.外国籍)×記事内容(ポジティブ・ネガティブ)の 2 要因分散分析を行った。その結果、望ましさと「快－不快」とも記事内容の主効果のみ認

められ(望ましさ: $F(1, 63) = 2710.60, p < .001, \eta^2 = .98$; 「快-不快」: $F(1, 63) = 390.77, p < .001, \eta^2 = .86$)、ポジティブ条件の記事はよりポジティブな(望ましさ: $M = 6.71, 95\% \text{ CI} = [6.56, 6.87], SD = 0.56$; 「快-不快」: $M = 6.38, 95\% \text{ CI} = [6.06, 6.70], SD = 0.84$)、ネガティブ条件の記事内容はよりネガティブな(望ましさ: $M = 1.10, 95\% \text{ CI} = [0.95, 1.25], SD = 0.27$; 「快-不快」: $M = 1.94, 95\% \text{ CI} = [1.63, 2.26], SD = 0.99$)印象を与えるものであることが確認された。

外国人に対する顕在的態度 外国人との交流や日本の治安に関わる質問項目(計 6 項目)について因子分析(主因子法、プロマックス回転、固有値の基準 = 1)を行った。その結果、第 1 因子「外国人犯罪による治安悪化」、第 2 因子「外国人に対するサポート」に分類された(因子間相関 = $-.489$)。第 1 因子には、「日本の治安は、外国人によって悪化させられている(負荷量 = $.86$)」と「日本国内で生じている犯罪のうち、日本人の犯罪よりも外国人の犯罪のほうが悪質である(負荷量 = $.78$)」の 2 項目($\alpha = .798$)、第 2 因子は、「企業はもっと積極的に外国人を雇用するべきである(負荷量 = $.73$)」「外国人が日本で暮らしやすくなるように、地域全体での支援に加え、個人的にも積極的なサポートをするべきである(負荷量 = $.67$)」の 2 項目($\alpha = .646$)であった。

外国人に対するサポートに関する項目の値を逆転させたのち、因子ごとに平均得点を求め、外国人に対する 2 種類の顕在的態度得点とした。顕在的態度得点の平均値および標準偏差を Table 2 に示す。

外国犯罪による治安悪化に関する得点について、中点(4)との差の検定を行った結果、全体的に外国人犯罪によって治安は悪化していないとするポジティブな態度を示していた($M = 3.27, SD = 1.39; t(66) = 4.30, p < .001, d = .52, 95\% \text{ CI} = [-1.07, -0.39]$)。国籍×記事内容の 2 要因分散分析を行った結果、外国籍の主効果($F(1, 63) = .27, p = .604, \eta^2 = .00$)および交互作用($F(1, 63) = .07, p = .792, \eta^2 = .00$)は認められなかったが、記事内容の主効果が認められた($F(1, 63) = 4.04, p$

$< .05, \eta^2 = .06$)。ポジティブな記事を読んだ参加者は($M = 2.92, 95\% \text{ CI} = [2.45, 3.41], SD = 1.25$)、ネガティブな記事を読んだ参加者より($M = 3.60, 95\% \text{ CI} = [3.13, 4.08], SD = 1.46$)、外国人犯罪によって治安は悪化していないという態度をより高く示した($d = .50$)。

外国人に対するサポートに関する得点について、中点(4)との差の検定を行った結果、外国人へのサポートをすべきというポジティブな態度を示していた($M = 3.43, SD = 1.05; t(66) = 4.50, p < .001, d = .55, 95\% \text{ CI} = [-0.83, -0.32]$)。2 要因分散分析を行った結果、外国籍による主効果($F(1, 63) = .87, p = .354, \eta^2 = .01$)、記事内容による主効果($F(1, 63) = 1.33, p = .254, \eta^2 = .02$)、交互作用($F(1, 63) = 1.64, p = .205, \eta^2 = .03$)のいずれも認められなかった。

IAT 効果量 Greenwald et al.(2003)の D 値を算出するアルゴリズム($D-2SDep$)を参考に IAT 効果量を算出し、正負を逆転した。したがって、この数値が高いほど「外国人」と「悪い」との連合がより強く、外国人に対するネガティブな反応を意味する。Figure 2 は、IAT 効果量の平均値および標準偏差を条件別に示す。

IAT 効果量について、中点(0)との差の検定を行った結果、有意な差がみられ、外国人に対するネガティブな態度を示していることが確認された($M = 0.64, SD = 0.40; t(66) = 13.17, p < .001, d = 1.61; 95\% \text{ CI} = [0.54, 0.73]$)。つづいて、外国籍×記事内容の 2 要因分散分析を行った結果、外国籍による主効果が認められ($F(1, 63) = 4.76, p < .05, \eta^2 = .07$)、pos.外国籍を表記した場合($M = 0.54, 95\% \text{ CI} = [0.40, 0.67], SD = 0.42$)よりも neg.外国籍を表記した場合 ($M = 0.74, 95\% \text{ CI} = [0.61, 0.88], SD = 0.35$)のほうが外国人に対するよりネガティブな反応を示していた。記事内容の主効果 ($F(1, 63) = .01, p = .906, \eta^2 = .00$)と交互作用($F(1, 63) = .50, p = .483, \eta^2 = .01$)は認められなかった。

顕在的態度と潜在的態度の関連 2 種の顕在的態度得点と IAT 効果量との相関係数を Table 3 に示す。いずれの顕在的尺度と IAT 効果量との有意な相関はみられ

Table 2 外国人に対する顕在的態度

	pos.外国籍		neg.外国籍	
	Pos.	Neg.	Pos.	Neg.
外国人犯罪による治安悪化	2.88 (1.29)	3.47 (1.50)	2.97 (1.24)	3.74 (1.45)
外国人に対するサポート	3.00 (1.13)	3.62 (1.05)	3.56 (1.09)	3.53 (0.86)
<i>n</i>	17	17	16	17

注) 値は 1 から 7 の範囲をとり、高いほどネガティブな態度を示す。

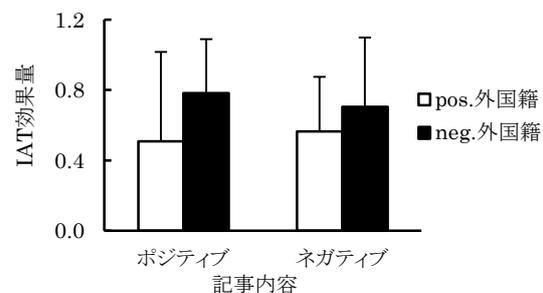


Figure 2 条件ごとの IAT 効果量

Table 2 外国人に対する顕在的態度

	1	2	3
1. 外国人犯罪による治安悪化	—	.381**	-.093
2. 外国人に対するサポート		—	.082
3. 潜在的態度			—

** $p < .01$

なかったが、顕在的態度の間に有意な正の相関($r = .381, p < .01$)がみられた。

考察

研究 2 では、新聞記事で描かれる事象の望ましさとそこで表記される外国籍を操作し、外国人ステレオタイプの活性化による影響について検討した。

外国人に関わる顕在的態度のうち、外国人犯罪による治安悪化に関して、比較的ポジティブな態度がみられ、「外国人による犯罪が悪質であり、治安を悪化させている」という意見に対する同意はみられなかった。また、このような態度は、記事で描かれた事象の望ましさがポジティブ(人名救助)であったとき、ネガティブなとき(殺人)に比べ、より顕著であった。しかしながら、表記された外国籍のイメージによる影響はみられなかった。

外国人に対してサポートすべきかどうかの顕在的態度についても、比較的ポジティブな態度がみられ、日本で暮らす外国人への支援に賛成する態度がみられた。これらの態度については、新聞記事で表記された外国籍や記事内容の望ましさによる影響はみられなかった。

一方、外国人に対する潜在的態度の指標である IAT 効果量においては、外国人に対してネガティブな態度を示していた。また、このようなネガティブな態度は、ポジティブなイメージの外国籍を表記した記事よりもネガティブなイメージの外国籍を表記した記事のほうがより顕著にみられた。しかしながら、記事内容の望ましさによる影響はみられなかった。

以上の結果から、表記される国籍がポジティブなイメージを持たれている外国籍のときよりネガティブなイメージを持たれている外国籍のときのほうが、その後の外国人に対する態度や判断がよりネガティブなものになるだろうという仮説 1 は、潜在的態度のみで支持され、顕在的態度では支持されなかった。また、記事内容がポジティブなときよりもネガティブなときのほうが、その後の外国人に対する態度や判断がよりネガティブになるだろうという仮説 2 は、潜在的態度および顕在的尺度のいずれにおいても支持されなかった。

潜在的態度において、表記された外国籍による影響がみられたことから、与えられた情報を全体的に処理す

る方略ではなく、特定の国籍概念が活性化されたことによってカテゴリカルな処理がなされたと考えられる。さらに、ネガティブなイメージをもたれている外国籍を表記した記事を複数提示されることで、それにリンクするネガティブな特性と同時に「外国人」という概念が活性化され、外国人一般に対してネガティブな反応を示したと考えられる。逆に、ポジティブなイメージをもたれている外国籍を表記した場合には、その国籍にリンクするポジティブな特性が活性化され、外国人が悪いとするステレオタイプの活性化の程度が弱まり、外国人一般に対するネガティブな反応が低下したと考えられる。

しかしながら本研究では、IAT 課題実施後の記事内容の再生課題において、記事中で表記された 2 種の国籍のうち両方を正確に再生できた者を分析の対象とした。このため、単に国籍が表記された記事を複数提示されただけでは外国人ステレオタイプは活性化せず、その情報を正確に記憶するほどの十分な注意が必要なかもしれない。

なお、顕在的態度においては、表記される外国籍や記事内容によって外国人に関連する態度がネガティブになることはなかった。これは、分離モデルの統制的過程を反映した結果であると考えられ、記事によって活性化された外国人ステレオタイプの影響が個人的信念や社会的望ましさによって抑制されたのではないだろうか。また、潜在的態度との関連については、有意な相関はみられず、潜在的態度が他の顕在的態度とは異なる処理過程あるいは特性を反映したものであることが示唆される。

総合考察

本研究では、ニュース記事への接触による外国人ステレオタイプの活性化の影響についてプライミング・パラダイムを用いて検討した。検討にあたり、顕在的尺度だけでなく潜在的尺度である IAT を用いた。その結果、潜在的態度は表記される国籍によって影響され、ポジティブなイメージをもたれている外国籍よりネガティブなイメージをもたれている外国籍のほうが外国人に対するネガティブなステレオタイプをより活性化することが示された。しかしながら、そのような傾向は国籍表記された記事を複数読んだ場合にみられた。潜在的尺度として用いた IAT が紙筆版と PC 版で課題内容が異なることは念頭に置かなければならないが、このような結果から以下のことが示唆される。ニュース記事 1 件だけではそこで表記された外国籍に関わる概念が活性化するに留まるが、複数の記事が提示されることによって外国人ステレオタイプが活性化されたという可能性がある。そして、記事で表記されている外国籍が全体的にネガティブなイメージをもたれて

いとすれば、外国人に対するネガティブなステレオタイプを活性化しやすくなる。一方、顕在的尺度においてはニュース記事を複数提示したとしても国籍情報による判断への影響はみられなかった。このことは、社会的望ましきへの懸念が大いに影響していたことが考えられる。そして、そのことはステレオタイプの自動的活性化と個人的信念の意識的活性化を想定するDevine(1989)の分離モデルを支持するものと考えられる。すなわち、たとえ統制的過程によって外国人に対するネガティブな判断の顕在的態度での表出を抑えることができたとしても、日常何気なく接触するメディアから受け取る情報は、外国人ステレオタイプを活性化させ、さらにはそれを維持するはたらきを担っていることが示唆される。

以上のように受け手が意識しないうちにステレオタイプが自動的に活性化してしまうことを知り得たうえで、わたしたちはマスメディアから送られる情報を鵜呑みにしてしまうことに対し注意を向けなければならないだろう。最近では、マスメディアによる情報をクリティカルにみる能力を受け手が獲得することを目的としたメディア・リテラシー(media literacy)という取り組みがある(大原, 2004)。例えば、ニュース報道で取り上げられているトピック(e.g., 社会的事件、政治、経済、スポーツ)ごとにどのような人物が登場し、その登場の仕方や役割、発言内容などを分析するといったものである(鈴木, 2000)。このような取り組みは、どのような情報がメディア側で選択され、いかにステレオタイプ的な描かれ方をしているかなどを受け手に気づかせる有効な手段であると思われる。そして、このような活動を通じてメディアからの情報を少しでもクリティカルに読み取ることができるようになれば、それらの情報だけに基いたステレオタイプの活性化あるいは形成を防ぐことが可能になるのではないだろうか。

引用文献

- Boucher, J., & Osgood, C. E. (1969). The Pollyanna hypothesis. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **8**, 1-8.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, **82**, 407-428.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Devine, P. G. (2001). Implicit prejudice and stereotyping: How automatic are they? Introduction to the special section. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 757-759.
- Dixon, T. L. (2006). Psychological reactions to crime news portrayals of black criminals: Understanding the moderating roles of prior news viewing and stereotype endorsement. *Communication Monographs*, **73**, 162-187.
- Dixon, T. L., & Maddox, K. B. (2005). Skin tone, crime news, and social reality judgments: Priming the stereotype of the dark and dangerous black criminal. *Journal of Applied Social Psychology*, **35**, 1555-1570.
- Domke, D., McCoy, K., & Torres, M. (1999). News media, racial perceptions, and political cognition. *Communication Research*, **26**, 570-607.
- Ford, T. E. (1997). Effects of stereotypical television portrayals of African-Americans on person perception. *Social Psychology Quarterly*, **60**, 266-275.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- 平凡社教育産業センター(編) (1987). 現代人名情報事典平凡社.
- Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977). Category accessibility and impression formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 141-154.
- Hurtz, W., & Durkin, K. (2004). The effects of gender-stereotyped radio commercials. *Journal of Applied Social Psychology*, **34**, 1974-1992.
- Johnson, J. D., Adams, M. S., Hall, W., & Ashburn, L. (1997). Race, media, and violence: Differential racial effects of exposure to violent news stories. *Basic and Applied Social Psychology*, **19**, 81-90.
- Jones, E. E., & Davis, K. E. (1965). From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.2), New York: Academic Press. pp.220-226.
- 紙山直泰 (2005). 外国人犯罪報道国籍表記やめて市民団体が各社に要望書 中日新聞記事データベース 中日新聞 12月15日 朝刊三重総合 17頁 <<http://ace.cnc.ne.jp/cgi-bin/clip/GU206>> (2014年11月12日).
- 金田宗久・岡本真一郎 (2012). ニュース記事で描かれる人物像に関する探索的調査 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要, **8**, 37-43.
- Kanouse, D. E., & Hanson, L. R., Jr. (1972). Negativity in evaluations. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. General Learning Press. pp.47-62.
- 唐沢 穰 (2001). 認知的表象—知識構造の成立とその影響 唐沢 穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 社会的認知の心理学—社会を描く心のはたらき— ナカニシヤ出版 pp.152-171.
- 川上和久 (1994). 情報操作のトリック—その歴史と方法— 講談社現代新書 pp.147-183.
- 吉川肇子 (1989). 悪印象は残りやすいか? 実験社会心理学研究, **29**, 45-54.
- 北村英哉 (2001). 社会的認知の基本的アプローチ 山本眞理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介(編) 社会的認知ハンドブック 北大路書房

- pp.13-22.
- Lemm, K. M., Lane, K. A., Sattler, D. N., Khan, S. R., & Nosek, B. A. (2008). Assessing implicit cognitions with a paper-format implicit association test. In M. A. Morrison & T. G. Morrison (Eds.), *The psychology of modern prejudice*. New York: Nova Science Publishers. pp.123-146.
- Lowery, B. S., Hardin, C. D., & Sinclair, S. (2001). Social influence effects on automatic racial prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 842-855.
- Matlin, M. W., & Stang, D. J. (1978). The Pollyanna principle: Selectivity in language, memory, and thought. Cambridge, Massachusetts: Schenkman Publishing Company. pp.1-13.
- 向田久美子 (2002). 大学生のもつ外国人・日本人イメージ (1)—イメージの構造— 聖セシリア女子短期大学紀要, **27**, 41-48.
- 向田久美子 (2003). 大学生のもつ外国人・日本人イメージ (2)—個人差要因の検討— 聖セシリア女子短期大学紀要, **28**, 61-71.
- 野寺 綾・唐沢かおり (2006). 恐怖管理理論にもとづく性役割ステレオタイプ促進要因の検討—紙筆版 IAT を使って— 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, pp.105.
- 野寺 綾・唐沢かおり・沼崎 誠・高林久美子 (2007). 恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討 社会心理学研究, **23**, 195-201.
- 岡部康成・木島恒一・佐藤 徳・山下雅子・丹治哲雄 (2004). 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討—大学生の超能力信奉傾向を題材として— 人間科学研究(文教大学人間科学部), **26**, 145-151.
- 大原由美子 (2004). コラム:メディアリテラシー 三宅和子・岡本能里子・佐藤 彰(編) メディアとことば 1 ひつじ書房 pp.194-195.
- Steele, J. R., & Ambady, N. (2006). "Math is Hard!" The effect of gender priming on women's attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 428-436.
- 鈴木みどり(編著) (2000). Study Guide メディア・リテラシー [入門編] リベルタ出版 pp.86-102.
- 湯川進太郎・遠藤公久・吉田富二雄 (2001). 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響—挑発による怒り喚起の効果を中心として— 心理学研究, **72**, 1-9.

註

- 1) 本論文は、第一著者が平成19年度に愛知学院大学大学院心身科学研究科へ提出した修士論文にデータを追加し、一部を加筆・修正したものである。なお、本論文の一部のデータは日本社会心理学会第49回大会(2008年)において報告された。
- 2) 英文要約については、愛知学院大学文学部 Gregory L. Rohe 准教授に校閲していただきました。記して感謝申し上げます。
- 3) 金田・岡本(2012)において、ネガティブな記事でイメージされやすい外国籍の選択率は、「フィリピン」に次いで「中国」が高かった。しかしながら、ポジティブな記事においても選択率が高かったため、本研究では「中国」の次に選択率が高かった「ブラジル」を用いた。

The implicit effects of nationalities indicated in news stories:

Two studies on stereotype activation of foreigners employing Implicit Association Test

Munehisa KANEDA (*Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University*)

Shinichiro OKAMOTO (*Faculty of Psychological and Physical Science, Aichi Gakuin University*)

This research aimed to examine the effects of stereotypes of foreigners activated by their nationalities indicated in news stories. To tap attitudes toward foreigners, we mainly employed an implicit measure: the Implicit Association Test (IAT). In Study 1, participants read a news story about a murder case in which the suspect's nationality was manipulated as follows: Japanese, a foreign nationality with a positive image, a foreign nationality with a negative image, and nationality unspecified. The result showed that the nationality in the news story did not influence participants' implicit attitudes toward foreigners. In study 2, participants were presented with news stories in which foreign nationalities (positive or negative images) and the desirability of the articles' contents were manipulated. Participants' implicit attitudes activated by nationalities with negative images were more negative than those activated by nationalities with positive images. On the other hand, their explicit attitudes were not influenced by the nationalities but by the contents of the article.

Key words: news stories, image of nationalities, priming, stereotype activation, the Implicit Association Test.